



富澤

暉 陸自60

偕行社に入るメリット

前防衛大教授・戸部良一氏の著書『逆説の軍隊』にはつぎのような趣旨の記述がある。

「組織・制度が当初においてはその時代の要請によって創られるものだとしても、その時代は速やかに過ぎ去る。よって組織・制度は常に古い状態にあるのだが、組織・制度自体は変わりがらず、なかなか変わらない。しかし、時代の変化が更に大きな圧力となって組織を襲う時、組織は終（つい）に変わる。自らを取り巻く政治・社会への対応としてやむを得ず変わっていくのである。この組織の変容は必ずしも法律や編制や規則の変更を伴わない。それらは人事や運用や解釈の変更によって為され、その曖昧さを群れる習性を持つ日本人が支えるのだ」

現代の日本で、明治以来の組織を継続することにどれだけの意味があるのか、については、様々な意見があろうと思う。しかし、もし継続するというのなら「現代の人」によってその組織を逐次変えていかねばならないのである。

受け継ぎ、残すべき偕行社の伝統には大きなものがある筈である。しかし、その伝統のどの部門を受け継ぎ発展させるかは、これから集まるだろう新会員たちがその都度決めていくべき問題である。

「偕行社に入って何のメリットがあるのか」とよく聞かれるが、入会によって得られるメリットは会員個々が自らつくり出していくものである。「タナボタ」的に与えられる筈もない。無論、われわれは、偕行社の先輩たちがつくりあげた伝統を唯々諸々と後輩に伝える「つなぎ役」でもない。

退職後の陸上自衛隊幹部が、自ら活用してメリットを奪い取るのに、この偕行社は格好の組織であると思う。同じ陸上自衛隊勤務をした人でも時代により体験が違い考え方が違う。陸軍経験のある人でも、年齢により、戦後の生き方により、様々な個性をお持ちである。それでいて、軍務を志したという共通の基礎を持つ。

国のことや、軍事のことも重要だが、趣味のこと、生きざまのこと、等についても一家言を持ち、能力の高い人々がいる。

自らの好みに応じて様々なグループに入り、あるいは新グループをつくり、こうした先輩・同輩・後輩方と交流し、切磋琢磨し、互いの発展を期することは同時に自らに生き甲斐を与えることである。

「更に、他人を知り、己を知る」ために「偕行社」を活用してはどうか。